

伊 吹

星野史子

今を去る六年前、平成二十三年の夏、『家庭画報』なる雑誌に「高野山一祈りを込めた華一」と題し、高野山にての折々の行事と共に行はるる供華を寫真にて紹介せられたる記事を見つれたり。この地、都會の喧騒を離れたる深い山中にて、修業の地、祈りの地とし千二百年もの長きにわたり脈々と時を刻みたる眞言密教の聖地なり。お山の清浄なる空氣感を漂はせる十六頁にも及ぶ寫真畫像には、釋尊誕生を祝ふ佛生會の折の金剛峯寺の板の間にいけられし身の丈以上の高さの松と菊の莊嚴眞華、ならびに（舊正御影會の）祖師空海御影像を置かれたる堂前の大なる五段に活けたる獻華あり。快慶作の孔雀明王像に供へられたる花、また八大童子像にも、各々童子像の両脇に一對の花を活けたる写真もあり。それらの中にありて、緑鮮やかなる「伊吹」に目吸ひつく。あまりの見事さに心強く引かれ、我もかかる華道を習ひたきものと深く思ひ入りたり。

この雑誌紙面との出會ひより數ヶ月後、高輪の東京別院に華道教室あるを知るを得ると共に、その教室に誘ひ給ひし友ありき。その思ひがけなき出逢ひに不思議さを感じ、嬉しさまさりて直ちに入會することとなりたり。

我が最初の格花の稽古の花材は、奇しくも先に衝撃を受けたる「伊吹」なりし。寸胴に花材は一種類のみを用ゐるが基本なり。「行中の行」と稱さるる花態にて、動きある「用流し」に活くるやうを指示さる。用流しとはよくは了解できねど、我にとりて初めての花活けなり。

最初が肝心なりと、寸胴の花器に花を支ふるための花留を作り始む。この華留、三角形の角度によりて活けんとする枝の向き、角度、安定感も決まる故に大切なる作業なり。やつと花器の内側に華留の治まり、さて伊吹活けんとして枝を矯め、横に傾けんとすれど、我が意圖する方向に逆らひて、枝はくるりとお辞儀をし、下に垂るるのみなり。誠に難しかりけり。枝は陽を浴びて育ちし表の面と反対の裏あり。三本の中心的役枝には活くる際、どの面を正面に向けるべきかの決まりあり。枝の流れを決むると同時にその表裏を意識せねばならぬ。それだけに枝の扱ひ困難なること極まりなし。我思わず「ああ〜」とため息漏らせり。それを聞きし隣の友思はず、笑ひけり。我いつの間にか、枝本來の姿を生かすこと忘れ、己れの思ひを枝に強要せんとせしことに氣付きて、はたと手を止めけり。

この伊吹とはヒノキ科白檜（ビャクシン）属なる常緑樹なり。特にこの芽吹き季節にはヒノキ特有の良き香りを漂はせ、眞に山中に居るがごとくに香るなり。我一息入れ、改めて再度作業を續けたり。伊吹の抵抗に形は整はざれど、とにかくにも初めての花活けとはなりぬ。

後に鎌倉の友人より聞くに、この伊吹とも呼ばるる柏檜、鎌倉建長寺の參道をなすとのこと。複雑にねぢまがりたる皺々の幹の太きが強烈なる印象を與へ、ゴッホの絲杉のごとく

上へと向はんとする枝振りに、宗教的な厳しさを感じさず、開祖の大陸より種持ち來りて以來七百七十年になんなんと生延びたる姿なれば、是非一度見に行かれんことをと獎めらる。されば、次に伊吹に出會ひたるときは、厳しさの加はれる樹形に活けんと覺悟せり。